

# 通夜・葬儀

釈尊（お釈迦様）は、今を去る約二千五百年前、インド北部のクシナガラで八十歳のご生涯を閉じ、永遠の安らぎに入られました。

この時、すでに体調を崩されていた釈尊の周りには、その身を案じ、大勢のお弟子が集まっておりました。釈尊は弟子たちに遺言となる教えを説かれその結びに

「友よ、私は永遠の安らぎに入るときが来た。友よ、我が最期を黙して見守り、無常を觀ぜよ。」

このように言われると、静かに最期の時に向かわれたのです。この夜、弟子たちは、夜通し釈尊を見守りました。釈尊最期の教えは、自らの死によつて

無常を示された無言の説法だったのです。

この故事にならない、私たちはお通夜を営みます。お通夜に臨んで、私たちは故人の無言の説法を共に受けとめたいものです。

今、私たちに無常の説法を説かれている故人は、すでに一切のこだわりを離れた方です。私たちも、こだわりを捨てなければなりません。故人が如何に親しい方であっても、何も争いがなかったとは言えないのではないのでしょうか。懺悔文をお唱えることで、故人と共に許し合うことが出来るのです。

お葬式は、故人に仏としての仏戒（帰依仏法僧、三聚淨戒、十重禁戒）を授ける式であります。仏教徒である私たちは、仏戒を受け戒名を授かった故人を仏様として敬い、人生の導き手とするのです。